

河内大塚山古墳(松原市)

北西側から見た河内大塚山古墳の全景/水を湛えた周濠が巡っている/墳丘長335mという巨大な前方後円墳だ!/左手前が前方部、右奥が後円部



「大塚陵墓参考地」として宮内庁が管理している



立入禁止

大塚陵墓参考地

宮内



6世紀中葉～後葉の築造と記されている/「大王墓」と見て間違い無いようだ

河内大塚山古墳(かわちおおつかやまこふん)

河内大塚山古墳は、西大塚の東除川西側に発達した、中位段丘面に築かれている。周濠を持つ巨大前方後円墳である。墳丘規模は全長335m、前方部幅230m、後円部直径185m、前方部高4m、後円部高さ20mをはかる。前方部はほぼ北面する。人工の造山だが、後円部頂上は海拔45mに及び、松原市内で最も標高が高い。

墳丘主軸長では、日本列島第5位のトップクラスだが、築造時期を決める資料に乏しい。しかし、①前方部は平板低平で、やや不整形をとること。②埴輪や葺石の存在がはっきりしないこと。③後円部に「ごぼ石」とよぶ巨石が存在するうえ、江戸時代後半の毛利家文書の「阿保親王事取集」(山口県立文書館蔵)に「磨戸石」とよぶ巨石が18世紀後半の宝暦～明和年間に見られたこと。④古墳内にあった石室材・石棺材と思われる竜山石や花崗岩が柴籬神社(松原市上田7丁目)などへ移されていること。

このようなことから、横穴式石室が後円部につくられていた可能性があり、6世紀中葉から後葉の古墳と考えられる。

中世には、丹下氏が古墳を利用して、丹下城を築いた。織田信長によって丹下城がこわされた後、江戸時代には前方部に大塚村が形成され、後円部には氏神の天満宮(菅原神社)が祀られた。

大正10年3月に国の史跡(昭和16年12月解除)となり、大正14年9月に陵墓参考地となったことから、昭和3年までに数十戸の民家は濠外に立ち退いた。

6世紀代の安閑天皇や、欽明天皇陵とする説があると同時に、墳丘未完成説も唱えられている。現在、宮内庁が管理する陵墓参考地である。

そこから前方部西隅へ渡る土橋がある



そこで、右手(後円部方向)を見たところ

[video](#)



同じく、左手の前方部前面方向を見たところ



それでは、時計周りに墳丘を一周してみよう/これは北側から前方部前面を見たところ

[video](#)



そこで、右手を見たところ



同じく、左手を見たところ



北東側から墳丘全景を見たところ



前方部の東隅をアップで見たとこ

[video](#)



その左手(後円部方向)を見たところ



東側を歩いて行くと、住宅の隙間に一寸した駐車場があり、墳丘が見えた



東側から後円部の辺りを見たところ

[video](#)



そこで、左手を見たところ



同じく、右手(前方部方向)を見たところ



所々、墳丘に近づける場所がある

[video](#)



そこで、左手を見たところ/周濠は埋まり、民家が押し迫っているが、鉄柵で仕切られている



同じく、右手を見たところ



後円部の南西隅の辺りまで来た

 video



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



これは南側から後円部の先端を見たところ

[video](#)



そこで、右手を見たところ/周濠には水が溜まっていない

[video](#)



同じく、左手を見たところ/前方には周濠の水が見える



西側から後円部を見たところ



フェンスの中を見たところ

[video](#)



そこで、右手を見たところ



同じく、左手を見たところ



西側から括れ部の辺りを見たところ

 video



そこで、右手を見たところ



同じく、左手を見たところ



前方部西隅へ渡る土橋が見えてきた/これで一周したことになる

[video](#)



そこで、右手の後円部方向を見たところ



さて、6世紀中葉～後葉にかけて築造されたとされる、これだけの大規模な前方後円墳の被葬者は一体誰であろうか！？

Wikipediaによると、今城塚古墳(継体天皇の墓とされる)と見瀬丸山古墳(欽明天皇の墓とされる)の間に編年されうるらしい。大王墓とすると安閑・宣化ということであろうか。

説明板にあるように、何らかの事情により墳丘が未完成で被葬者が納められていない可能性も指摘されている。墳丘内に埴輪や葺石が存在しないことや前方部が後円部のように盛り土がほとんどなく平坦であることはそれを裏付けることになるのかもしれない。

そもそも、5世紀末葉の雄略天皇の墓とされる岡ミサンザイ古墳築造後は、大王墓としての前方後円墳が縮小されていく中で、何故、6世紀中葉～後葉にかけて突如として墳丘長が300mを越える河内大塚山古墳が造営される必要があったのか、これを少し考えてみたい。

同じ6世紀後葉には飛鳥の地に、欽明天皇の墓とされる墳丘長330mの丸山古墳(見瀬丸山古墳あるいは五条野丸山古墳とも)が造営されている。この二つの古墳の関係から河内大塚山古墳の被葬者に迫ってみよう。

欽明天皇と安閑・宣化天皇の血筋の関係は次図の通りである。

継体天皇から欽明天皇への王権の移行については諸説あるようだが、安閑・宣化天皇が実在していたとするならば、河内大塚山古墳の編年からして安閑天皇または宣化天皇、あるいは安閑・宣化天皇の墓として造営されたものである蓋然性は高いと思われる。

では何故、古市古墳群の近くに所在するのであろうか。そして、丸山古墳は何故、飛鳥に所在するのであろうか。

古墳の造営主体は天皇というよりも、天皇を支える大豪族(たとえば后を出した大豪族)が担っていたのではなかろうか。つまり、丸山古墳の造営主体は当時から勢力を伸ばしてきた蘇我氏であることは容易に想像がつく。

では、河内大塚山古墳の造営主体は誰であらうか。

上図から、安閑・宣化天皇を支えたのは尾張氏やそれを支持する大豪族と思われる。(たとえば大伴氏など)

安閑・宣化天皇は応神天皇5世の継体天皇の血を引くものとして、その正統性を誇示すべく、敢えて継体天皇の墓の近くではなく、応神天皇の墓の近くにその奥津城を築こうとしたとみるのはどうだろうか。(応神天皇の墓は宮内庁によれば誉田御廟山古墳ということになるが、異説もあるようだ。しかし、どの古墳が該当するにせよ、河内大塚山古墳と応神天皇の古墳は近い位置関係にありそうだ)

結果的には、造営半ばで放棄されてしまったのかもしれないが、この河内大塚山古墳の規模に触発したのが欽明天皇を支える蘇我氏であったのではなかろうか。そして飛鳥に同等の巨大古墳を築くことになった

のでは・・・(そこには天皇(当時は大王)を支える大豪族間の軋轢が垣間見えるように思える)

なお、河内大塚山古墳は欽明天皇の墓として造営されたが、途中で飛鳥に造営することになって途中放棄されたという見方もあるようだが、古墳築造には巨費(特にこんな巨大な古墳であればなおさら)が必要となるわけで、いかに大王の墓と言えども、ほとんど出来ている状態で放棄とは考えにくいのではあるまいか。河内大塚山古墳は、世界文化遺産となった百舌鳥・古市古墳群のリストには含まれていないが、歴史的にみると非常に重要な古墳であると思えるのだが・・・

